学園王子in非王道

ハタ理事長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園王子ｉｎ非王道

【Ｎコード】

Ｎ６６５０Ｙ

【作者名】

ハタ理事長

【あらすじ】

『鳳来学園』其処は男子だけの秘密の花園……所謂ＢＬ学園である。そこに王道転校生がやってきて！？王子と有名な校紀委員長である主人公が適当に傍観しながら巻き込まれていく物語。※恋愛：未定（攻め主）／不定期更新

００　設定（前書き）

読む前の注意事項

1．アンチ王道をメインにしたストーリー展開→メインストーリーを傍観＝サブ視点

2．王道主側や生徒会役員等の扱いが悪い可能性→誹謗中傷／有

3．ＢＬ要素／有→主人公：バイ／タチ＝攻め要員

4．Ｒ指定／有→不適切な表現（暴力／卑猥）

００　設定

▼学校説明

【鳳来学園】（ほうらいがくえん）
幼小中高とエスカレーター式の一貫した教育理念を持つ。
有名な金持ち学校で、都内には幼稚舎～小学舎が建てられている。
中高の校舎は人里離れた場所に建てられており、全寮制となっている。
お金も掛かるが偏差値も高く、外部生の数は少ない。故に、転校生は稀であり物珍しい。

▼学園内

◎寮内
上層部：役付きメンバー
中層部：一般生徒
下層部：食堂や売店等

役付き部屋は１人、一般生徒の部屋は２人部屋（トイレ／キッチン／風呂等有）

▼人物紹介（追加形式）

◇主人公【王子】校紀委員長３年
神堂（しんどう）　蓮（れん）
身長：１８７ｃｍ

容姿：黒髪／中性的

◇サブ1【チャラ男】生徒会会計3年
橘（たちばな）　清四郎（せいしろう）
容姿：茶髪／装飾品：ピアスやブレスレット等

◇サブ2【鬼／オカン】校紀委員副3年
本城（ほんじょう）　雅（みやび）
容姿：黒髪短髪／目が釣り上がり気味

◇サブ3【マロ】校紀委員2年
平等院（びょうどういん）　麻呂（まろ）
容姿：黒髪を一つに結っている／太短い眉

◇サブ4【姫】校紀委員1年
藤原（ふじわらの）　菫（すみれ）
容姿：黒髪の姫カット

００　設定（後書き）

?:此方は以前、自サイトにて載せていた小説を編集継続も兼ねて移転掲載したものです。
?:気ままにゆっくりとしたペースで更新致します。加えて、文才不足や注意力散漫と、誤字脱字等が激しいです。緩い気持ちと生温かい目で見守って下さると幸いです。
?:ジャンル的に悩ましい所が御座います。その為、何か問題等御座いましたら、御指摘や御忠告の方をお手数をお掛け致しますが私宛にご連絡下さい。出来るだけ早い対応を取らせて頂きます。

01

青空の下、桜が満開に咲き誇っていた。

周りは自然に囲まれ青々とした風景が目に付き、人里離れた場所。

――そんな奥深い隠れた所にソレはあった。

桜並木に導かれる様にして、そびえ建つのは『鳳来学園』と書かれた立派な門に壮大な校舎。

学び舎から広い競技場、宿舎、食堂、売店等々、設備が整い過ぎだとも言える程の有数の施設を完備している。

幼小中高とエスカレーター式となっており、幼稚舎と小学舎に関しては宿舎は無く、交通機関の整った別の所に校舎は建っている。その為、此処にあるのは中学と高校の２つの校舎である。

広大な敷地を満遍なく使い、加えて豪華な造りが施されたその学園は、この土地あってのモノであり、普通の都会では出来ないモノである。

しかしながら、なんでも揃い他へ移動しなくても良い便利な其処は、隔離された空間でもあり世間一般とはかけ離れていた。

女子生徒の存在しない男子だけの学園。在学するのは、何処かの社長の息子や御曹司と言った裕福層の人間ばかりである。

――お金持ちの通う其の男子校は禁断の園でもあり、『ホモ』又は『ゲイ』が飛び交う趣向の変わった者が多かった。

〜〜〜

宿舎である学生寮の高層階の一角。
床にはレッドカーペットが敷かれ、周りの装飾にも力を入れている様子。非常に内装が凝っており、位の高い者が住まう雰囲気が漂っている。

此処に備え付けられている一つの黒いドア。通常の生徒達が使用している部屋のオートロック式のドアとは違い、とても厳重な造りをしており要塞の様な固さと重みがある。加えて、新しい住人の為に造り変えたのか、何処となく真新しさを感じさせる。

そんな、ひと際目立つ部屋の番号は『ＳＳ－８０１』であり、派手な表札が存在している。しかしながら、ソレがあるのはドアより少し離れた壁の所であり、押し退けられる様にして雑に貼り付けられている。
代わりに、眠る羊が可愛い『ＲＥＮ』と書かれた真っ白なプレートがドアの上部に掛けられており、大変メルヘンな感じとなっていた。お陰で、物々しい雰囲気を放つ黒いドアが緩和されている。
実に、この部屋の住人は良い意味で趣向がハイセンスであった。

〜〜〜

モノクロで統一されたシックなデザイン。
人が住んでいるとは思えない程綺麗で、モデルルームの様な部屋である。

真っ黒のダブルベットと、とても大きなソレに寝るのは同じく真っ黒で居て何処か違う、艶のある黒。

髪はそれ程長く無く、耳と項辺りから白い肌が見える。

何処か人形めいた綺麗さではあるが、ちゃんと呼吸もしており生きた人間である。

中性的な容姿に加えて、寝ている姿は可愛いモノがあり性別の判断が付け難い。

良く見ると、ベットの下には大変可愛らしい大きな羊の抱き枕が落ちていた。

しかしながら、１８７ｃｍと高身長な女性などそうそう居ないだろう。

そんな彼の名前は神堂蓮（しんどうれん）と言い、列記とした男であり、今を時めく花の男子高校生でもある。

――眩しい……。

瞼越しから温かい日の光を感じた。

薄く開いたカーテンの隙間から光が射し込み、意識がこちらへと戻り始める。

――何故かな、体が重いんだけど。

覚醒しきっていない頭を働かせて、重たい瞼をゆっくりと持ち上げる。

視線を下げれば、胸元辺りに茶色いモノが視えた。

その物体の正体が何なのかと問いかける様に思考が彷徨う。数秒すればいつもの事だと脳内で処理が行われ「彼」（人）を認識する。

彼の名前は、橘清四郎（たちばなせいしろう）。

普段は、人懐っこい笑顔に緩い性格と口調が印象的な青年である。

こうして寝ている時でさえ、茶色の髪が彼を明るく彩っていた。外し忘れたピアスやブレスレットなどの装飾品が、更に存在を華やかに煌かせて魅せている。

彼は自分の部屋があるのにも関わらず、蓮の部屋に入り浸っている。且つ、昨夜は自分の部屋へと寝に帰った筈なのだが、何故か蓮のベッドに入り爆睡しているという何とも言えない状況。

偶にこうして気付けば一緒に寝ている事があり、態々蓮の所まで来て寝ると言ったモノ好きな人間である。

――朝ごはんは、普通に和食でいいか。見た目に似合わず、みそ汁が無いと不貞腐れる誰かさんも居る事だしね。

一つ苦笑をこぼし、彼の柔らかな茶色の髪を撫でつけた。

〜〜〜

「レンくん、ボク暇なんだけど。かまってよー」

はいはい、と軽く流しながら部屋に備え付けられたキッチンを使い、朝ごはんの準備をする。

今朝は、大変重苦しい起床の仕方をした蓮。今も背中に、その元凶である猫の様な人を張りつかせている。否、勝手に張り付いていると言った方が正しい。

寝ている橘を起こさない様に静かに自分の上から退かし、きちんと毛布の中の突っ込んで寝かせてきた筈なのだが、いつの間にやら起きてしまったらしい。

――出来れば、もうちょっと寝ててくれた方が助かるんだけどね。

料理の邪魔だから離れて欲しいのだが、この問いをした所で無駄だろう。後ろでブーたれている橘の相手を適当にしつつ、料理を続ける。

暇だと言う彼に料理の手伝いをさせるという選択肢は、まず無い。

見た目に反し秀才であり運動も出来る橘であるが、料理に関しては、てんで駄目であり手伝わすのは蓮に対して酷というもの。包丁の扱いなどが危なっかしくて見てられないのだ。

昔、「ゆで卵を作れ」と言い渡した所、電子レンジに卵をそのまま入れて爆発させた事もあり、後始末が非常に大変であった事を蓮は今でも覚えている。実に、苦労に耐えない良い思い出である。

慣れた手付きで手際良く作られるソレは、大変美味しそうである。

――まぁ、時間も無いしね。こんなもんかな？

途中、橘につまみ食いされ邪魔されつつも、日本の朝を象徴する様なご飯が出来上がる。

結構な量をつまんでいたのにも関わらず、「早く食べようよー」と幼い子供の様に急かす彼に苦笑を禁じ得ない。

「わかったから。とりあえずお皿に盛るから、君はお皿を用意して」

「はーい」

元気の良い橘の返事に笑いつつ、蓮も近くにある小皿におかずをよそっていく。

２人仲良くお皿をテーブルの上に並べた後は、席に着き、揃って「いただきます」をしてご飯を食べ始める。

「うん。やっぱり、レンくんのご飯は美味しいね」

「うん、ありがとう。そう言ってくれるのは非常に有難いんだけどさ、もうちょっとゆっくり食べようね」

さっきまで蓮に構ってもらえず不機嫌だった橘は何処にも居らず、今では幸せそうにご飯を食べている。

全く現金と言うか何と言うか単純な子だと蓮は思い、また一つ苦笑するも表情は何処となく嬉しそうである。

橘は決して品を損なう様な食べ方をしている訳ではないのだが、些かペースが早い。

特に、みそ汁を食べている時は至福の表情を浮かばせており、お腹の中へと消えていくスピードが尋常ではない。彼にとったら飲み物も同然の勢いである。

そんな橘の為に、みそ汁の入った鍋だけ食卓の場であるテーブルの上に置かれており、おかわりをすぐ出来る仕様になっている。

蓮の作る料理は大抵どれも美味しいと評判であり、実力は高い。今日のみそ汁は、ワカメと大根と豆腐と言う割とスタンダートな具で構成されているが、ダシから力を入れて作ってる所為かとても旨い。

「食べたら寝ちゃおっかなー。授業とかめんどうだし」

「セイちゃんさ、何ふざけた事言ってるの？　1時間目からちゃんと授業に出てくんないと困るんだけど。校紀委員長として流石の俺も君の事を庇い切れないよ」

「生徒会役員の仕事でー、とか適当に言っておけば大ジョブだって」

「その言い訳を既に何回使っているのか、君は分かっているのかな？　毎回そう言ってたらバレるからね、普通。現にバレてるよ」

「うそー」と言いつつも、どうにかなる精神で気にもしていない橘。

彼は確かに生徒会役員であり会計担当である。

そもそも、こんな性格の人間がどうして生徒会役員になれたかと言うと、この学園は変わっており人気投票で役員が決まるのだ。

投票に置いて、まず一番目に見た目で来る。容姿が整っているかいないかで大きく勝敗を分ける。後は、おまけで家柄や成績、性格等が重要視されてくる。

その為、顔面偏差値が高く家柄も良い、加えて文武両道なパーフェクトボーイの橘が会計として名が上がり、下に圧倒的差を付けて選ばれ今に至ると言う訳である。何も彼自身がやりたいと思って役員を担っている訳ではないという事。

――俺もこんな役職さっさと誰かに譲って、君みたいに寝てたいね。

彼のやる気のなさには呆れるが、蓮に取ったら、同時に羨ましい限りでもある。

人気投票で決まる生徒会役員に対し、蓮が居る校紀委員は、校紀委員長を中心とした身内のみで後任を探し決める。

故に、割とまともに仕事をこなす真面目な人間が多く、校紀命と言える人員が揃っていく。

蓮自身が真面目かと聞かれれば、否であり適当に過ごすマダオ真っしぐらな愉快な人種である。しかし、任された仕事は割とまともにこなす人間でもある。出来るだけ私情を混同させない様にしていた。

そう言う意味で言うと、前期の校紀委員の人選は正解と言えた。橘以上の高ステータスを保持し、且つ、適度に仕事をこなす蓮は委員長としては適任である。

一番上に立つものは目立ち豪胆でなければならない。いやに細々として熱心過ぎるのも下に付く側からしたら微妙と言うもの。
そう言う役割は、副委員長辺りのサポート役が担えば良いポジションである。
と、前期校紀委員の裏では色々と考えられ、生徒会の人気投票で既に候補として入っていた蓮をタッチの差で任命し舞台から降ろした。こうして、生徒会入りを阻止された蓮は校紀委員長として今に至ると言う訳である。

――こんなんでも成り立ってるんだから生徒会は凄いよね。尊敬するよ。

役員がら、仕事に忙しい日々を送っている蓮ではあるが、自分が生徒会ではなくて本気で良かったと思っており、個性豊かな生徒会役員達の中で生活する自信はなかった。
自分が所属する校紀委員の生徒達だけで既に手一杯である。

ちなみに、幼小中高とエスカレーター式の学校の為、中学から人気投票で決まる橘は6年連続生徒会会計を人気投票で勝ちとっており、中1の時から担っている。
中学時代の生徒会役員も大体が持ち上がっている為、役員の人員は変わらないに等しい。故に6年連続会計と言う偉業を成し遂げていた。

蓮の方はと言うと、中学の時に海外留学をしており、当初の予定では、そちらにしばらく永住する心積もりいたのだが、大人の事情と橘の要望もあり大学卒業と短期で済ませ、高校2年の後半に帰ってきたのだ。その為、役員自体が初めてであり、新任である。

中学在学中と校紀委員長に任命されるまでの短い期間でさえも、

生徒会長として名が常に上がっており、裏では真の鳳来の生徒会長は蓮だと噂される程の人気を誇っていた。

故に、今まで何の役も担っていない事の方が不思議であり、周りからしたら新任と言うには些か首を傾げる所であった。

01（後書き）

gd gdスタートで申し訳ありませんが、こんな感じでこれからも参りますので御了承下さい。

02

「で？　今日も出席しないで、午後から重役出勤って事でいいのかな？」

「Ｔｈａｔ'ｓ　ｒｉｇｈｔ！」

無駄に上手い発音でされる元気の良い返事に呆れるも、其処は蓮である。

「なるほどね。生徒会役員のお偉い会計様は、正々堂々と校紀委員長の俺に喧嘩を売っていると……なら、もう服装検査では君の担当外れるね」

「ちょっと、待ってレンくん！　たんまたんま！」

必死に止めにかかる橘だが、「天下の会計様に態々、俺みたいな適当な委員長が出張る必要無いよね？」と、蓮は悩ましげでいて何処か悲しそうな表情で言葉を続ける。目は些か反応を愉しまんとする嬉々したものであったが。

これには橘も困った様である。

「お願いだから、それは勘弁してー。ボク、校則違反余裕でしてるんだからさ」

彼は、パッと見ただけでアウトである。まず髪の毛は茶髪で地毛では無い。加えて、耳にピアス、腕にはブレスレット数個着ける等、大変ジャラジャラとしていて学校に来る装いではない。

其処を彼の人柄と地位、蓮の適当検査で難を凌いでいたのだ。

故に、蓮が担当にならなければ、軽いお咎めと言う名の説教等は確実に待っている。

「そんな事、知らないよ。君が悪いんでしょ。うちの所の副でも君の担当に回してあげるから感謝しなよ」

「えっ……もしかして、お宅の副委員長って言いますと……例のあの方ですよね……」

「うん、そう。強面で有名なミヤくん」

「ですよねー。うえー」

げんなりしている橘に「きっとガミガミ説教垂れてくれるから。良かったね」と、更に蓮は優しい笑みで追い打ちを掛ける。

「えー、やだー」と口をとがらせてそっぽを向く橘であったが、ふと何か名案を思い浮かんだのか笑顔になる。

その笑顔に蓮は嫌な予感しかせず、心の中で溜息を吐く。

「うーん、レンくんが居るなら出ようかなー？」

やや首を傾げてニッコリと笑顔で言う彼に、今度はきちんと心の中ではなく外へと溜息が出る。

――この猫は本当に気まぐれ屋さんで可愛い性格をしているよ。

「意味が分からないから、却下。第一、俺と君とではクラスが違うから必然的に俺は居ない事になるじゃないか」

「大ジョブだってー。そこは、レンくんの力で俺の教室に――」

「セイちゃん。君は少し黙ろうか」

蓮は素早く箸で朝ごはんのおかずである煮物の山芋を掴み、橘の口へとぶち込み強制的に黙らせる。

何だかんだ言って、彼らはまだ朝ごはんを食べている最中である。

「俺が君のクラスに移籍するなんて有り得ないし、そんな事で権力を使うほど俺は馬鹿でも其処まで落ちぶれたつもりもない」

意外と大きい山芋を口の中でモゴモゴとさせる橘に向けて「分かってくれるよね？」と、ゆっくりと語りかける様に蓮は言った。

実に先程と寸分の狂いも無い優しい笑顔ではあるが、「いい加減さっさと授業に出ろよ」と目が明らかに本気（マジ）であり威圧されるモノがあった。確実に先程より不機嫌だろう事が分かる。

しかしながら、相手も強かった。

口の中に入っていた山芋を「ごくん」と完食しきちんと飲み込んだ後に、「いーじゃん、偶には一緒に授業受けよーよ。レンくんが居ないならセイちゃん出ないもーん」と、駄々をこね始めた。

蓮の従兄妹だけあって慣れているのかモノともしない強情さである。

――あー、始まったよ。セイちゃんの最終兵器である駄々っ子攻撃……。

鬱陶しそうにソレを眺めながら蓮はどうしようかと少し悩む。

このまま我がままな子供を放って置くのも一つの手ではあるが、駄々をこね出した橘を放置すると後が面倒だと蓮は思う。

「もう朝から授業に出ろなんて言わないよ。君の好きにすればいい」

後は事は橘の自己責任として任せる事にし、蓮はソレで妥協する。

ついでに、「ご飯中はもう少し静かにしろ」と注意を一つし、駄々っ子攻撃を止めるように言う。

「レンくんのけちんぼー」

不貞腐れ文句を言っているが、どうやら橘の方もこれ以上は無理だとさとり諦めたのかご飯に集中し出した。

「そうだね、ケチで結構だよ」

とりあえず、彼が分かってくれた様なので一安心し肩を下げる。

――このままだと朝のＨＲに間に合わないかもね……流石に１時間目までには着きたい所だけど。

チラッと壁に掛けられた時計に視線を向ければ、既に時間はギリギリでレッドゾーンに突入しつつあった。

内心、急ぎつつも綺麗にオレンジ色のモノだけを端へと避けて食べている橘へと目を付ける。

「ほら、ちゃんとニンジンも食べなよ」と、彼のお皿の真ん中へと人参だけをたくさん盛る。

「げー、さっすがレンくん。するどすぎー」と肩を落とし元気の無くなる橘であったが、蓮が「残すなよ」と目をギラつかせて見張っている為に食べないと言う選択肢を許される筈もなく、泣く泣く口の中へ放り込みムシャムシャと食べる事になる。

何も蓮の料理が不味い訳ではない。食べろと言えば蓮の料理なら美味しく調理されている為、苦手なモノでも普通に食べられる。

ただ自分から積極的に食べる事が出来ないのと、体に染みついた慣れ故の反射的行動だった。幼少の頃の味覚の違いなどによるトラウマ的苦手要素が未だ克服できずにいたのだ。

人参に悪戦苦闘しながらも食べる橘を見ながら、蓮はふと思った。
――なんで俺が居ないと出たくないなんて無理な要求したんだろうね。
授業に出る出ないの話で何故、自分が引き合いに出されるのか未だに意味が分からなかった。
ただ単に困らせたかっただけなのか、それとも授業に出たくない口実に言っただけなのか……。
蓮はしばしの間、考えを巡らすが、なにぶん時間が無い。
今は食べる事に集中である。
そのまま追求する気は起きず、否、忘れ去られる様にして授業云々の件は消えて行った。
故に答えは謎のままである。

03

日も落ち、窓からは月の明かりが微かに光を放っているのが見える。

放課後にある委員会の活動時間も終わり、寮の部屋へと帰宅。
蓮は自室にて書類の整理をしていた。

眼鏡を一旦外し、目頭を揉む。椅子の背へと体を預け、天井を仰ぎ一息吐く。
最近は毎夜行われるコレの所為か、視力の低下が見受けられ作業時等に置いては眼鏡は欠かせないアイテムとなっていた。
ちなみにノンフレームタイプの眼鏡。移動に伴い、首に掛ける眼鏡ホルダーを愛用している。

――今の時代でも、こういうのは手書きだから困るよ。

紙媒体と大変かさ張り、机の上にタワーを作り今にも倒れて来そうな紙の山。
加えて、パソコンの画面には大量のデータ。数字や文字の羅列がびっしりと書き込まれており、表計算等が行われていた。
至急と急がすソレらに軽くうんざり気味の蓮。「データ形式で直接送信するか、媒体をディスクにして提出すれば良いのでは？」と、全くもって紙の無駄遣いでありエコじゃない行為を盾に、心の中で文句を言う。
しかしながら、紙媒体の正確性と保証された消えない実体がこれらの重要な案件には必要とされるのも、また事実。彼自身も、ソレ

を理解してるだけに表立って言えなかった。

面倒くさそうではあるが、手を動かすのは止めない。期限の迫るモノから的確に素早く捌いて行く。

机に載る大体が、校紀委員長として最終確認や判が必要なモノ。蓮行き確定であり、彼が処理しなければ終わらないモノ。

放課後の活動時間は、主に他の役員達も出来る書類を一緒に捌くなど多忙を極める為、こうして自室に帰った後のプライベートタイムも書類整理に追われ消えて行く。

PCを操作するキーボード音や紙の上を滑る様に押される判の音など、至って静かな室内。

防音効果もバッチリな、非常に作業場として最適なこの部屋。そのはずなのだが、蓮は嫌な予感に眉を寄せる。

――何か玄関の方で凄い物音したんだけど。って、コッチに来る……。

そんなコーヒー片手に仕事をする蓮の自室へと、毎度お騒がせな訪問者がやって来る。

「レンくん、やっほー！」

橘が蹴破るかの如く勢いでドアを開け放ち、騒音と共に中へと入って来た。

回転式の椅子を回し後ろへと振り返り、蓮は「うるさいよ」と一言言う。大変不機嫌そうである。

普通であれば不法侵入で訴える所であるが、蓮による暗黙の了解

がなされている為、問題にはならない。
一応、立場上の問題もあり、何かあると不味いので正式に許可もとってある。
役付きの特権も加味して理事長の了承のもと、橘のカードキーでも開く様にシステム自体を蓮により弄られていた。
そうでもしなければ、橘が無理やりにでもこじ開けて入って来そうな勢いであり、無駄に行動力溢れる彼を犯罪者にせずに止める事は出来ない。

ついでと言う事で、橘の要望もあり蓮のカードキーで彼の部屋へ行く事も出来る。
とは言え、大抵は蓮の部屋へと橘が勝手に乱入して来る為、蓮が自分のカードキーを利用して彼の部屋を開ける事は滅多にない。

「聞いておどろけ、見て……なんだっけ？　まぁいいや。じゃじゃーん！」

何時もより大はしゃぎで、蓮の迷惑も何のその駆け寄る彼の手には1枚の紙。ソレを目の前に掲げてみせた。
その紙が何かは知らないが、興味が無い蓮は首を傾げるも橘へと視線を向けた後は、背を向け止まったままの作業に戻る。
あまりの反応無さに橘は泣きマネに入り、ちゃんと聞いてくれるまで此処から離れないと言う鬱陶しい駄々っ子攻撃をし始めた。

――君って、ホント面倒くさい生き物だよね……。

溜息を一つ吐き、「わかったよ」と蓮が折れる。
このまま放置していたら作業も捗るどころか滞る一方だと理解している為、方向転換し素早い対応を取る事にした。

「さっすがレンくん！　持つべきものは、血のつながった従兄弟殿だよねー」
「そうだね。セイちゃんのお守なんてそうそう務まるもんじゃないよ」

――出来るなら、すぐさま誰かに代わって欲しい。

呆れた様に言う蓮に、「おもりって何ですかー。ボク、そんなに子供じゃないもーん」と、口を尖らせてプンプンと怒る橘。
その姿自体が、もう既に子供染みている行動だと蓮は思い、頭が痛い。これを素でやっている訳じゃなく、態と演技している事を蓮は祈るばかりである。

「で？　その紙が、どうしたって言うんだい？」
「そうそう、これ見てってば。面白いからさー」

蓮がきちんと軌道修正をすれば、目的を思いだしたのか妙に楽しそうな顔で橘が再度、紙を突き出す。
突き出されたソレを仕方無しに見れば、ズラズラと経歴などが書かれた文字と髪の毛がモジャモジャした生き物がそこには載っていた。
勝手にそんな紙を生徒会役員でもない者に平気で見せて良いのかと思うも、既に自分は見てしまった後であり、同罪である。
都合の悪い事は目を瞑るたちの適当人間の蓮は、其処は見なかった事にする。後々問題になろうと、その時はその時である。後で考えれば良い事。
否、既に蓮の中ではある程度の逃げのシナリオが出来ている。

――適当に教師陣の管理の低さとかで、責任擦り付けて揉み消せ

ばオッケイでしょ。

「へえ、凄いね。コレって、まりもってやつ？」

「そうそう！　転校生のマリモちゃん！」

「面白くなりそうだよねー」と楽しそう言う橘が持って来た紙、又は蓮が問題になったら揉み消そうとしている個人情報が載ったモノとは、この鳳来学園に転校してくる生徒の資料だった。

２人が「マリモ」と言ったのには訳があり、転校生である青年の顔写真の部分が殆どボサボサの髪の毛で埋まっていたからだ。

加えて、瓶底眼鏡と時代を感じさせる組み合わせにより明らかに浮いていた。

「今時こんな格好の子いないよ。ネタのつもりかい？　それとも天然なのかな？」

「さぁーね、全部じゃない？　ネタだったらすっごく笑えない冗談だけどー」

「まぁ、どちらにしても俺には関係ないね」

「でたー。レンくんの無関心するー。相変わらずの興味の無さにはセイちゃんも感心かんしん」

蓮は、用は済んだとばかりに御丁寧に首まで縦に振り頷く橘は無視して、作業に戻る。その際、耳栓をしており彼の声が一切聞こえない様に遮断をしていた。

完璧に集中し出した蓮を見て橘も、もう相手にしてくれなそうだと悟る。

しばらくの間、橘は椅子に座る蓮の首に腕を回し、背もたれ越しから抱きつき「充電」をしていた。

彼曰く、蓮に抱きつくと癒されるらしい。生活をする活力として必要不可欠な要素であり、補充は大事との事である。

満足したのか、「充電しゅーりょー！」と言って元気良く蓮から離れる。

携帯で誰かに電話した後、背中を向ける蓮に「レンくん、またね。おやすみー」と一声掛けて部屋から出て行く。

「はいはい。セイちゃんもおやすみ」

――いい夢みなよ。

窓辺に浮かぶ月を眺め、一つ苦笑した。

04

まだ日が暮れるにしては早いのだが、外は薄暗く生憎の雨模様。雨粒が地面へと落ちる音が微かに聞える。

何処か憂鬱とした雰囲気を漂わす。

しかしながら、そんな感情を抱く暇さえ与えない、時の流れが早い区間も同時に存在していた。

委員会室の部屋が設けられる上層部の中でも一番下のフロア。比較的連絡が取りやすい位置でもあり他のフロアよりは人通りが多い。

そして、ひと際賑わいをみせる場所があり、其処は通常の煌びやかな内装の一切が取り払われている。シンプルな造りが重視されていた。

切り離された様でいて不自然ではない不思議な空間。広いその場所には一つだけ白いドアが設置されており、他に部屋へと導いてくれそうなドアは無い。

故に、その空間に入った者は皆、誘われる様にして白いドアへと手を掛け中へと入って行く。傍から見れば、異世界の扉を開け何処かへ消えてしまった様に見える程、其処は不思議で溢れていた。

白いドア上部には、ニッコリ笑顔でお茶を飲む羊が可愛い真っ黒のプレートが掛けられており、其処には『みんなの校紀と茶室』と書かれている。

よく付近の壁へと目を走らせ探せば、蓮の部屋の様に『校紀委員会室』と書かれた表札が押し退けられる様にして適当に貼り付けられていた。

〜〜〜

放課後は毎日の様に、役員としての仕事の為に蓮は『校紀委員会室』と書き、「みんなの校紀と茶室」と読む委員会室に集まっている。

室内はと言うと、白を基調としたメルヘンチックな可愛い部屋となっており、至って明るく校紀と言う固いイメージ払拭していた。

それ以上に、不思議めいている印象の方が強い為、おとぎの国に迷い込んだ様な錯覚を起こすほどだ。とても凝った造りをしている。

委員会室には生活できる様な設備が出来ており、キッチンやお風呂、仮眠室としっかりと完備されていた。

「ちょっと作り過ぎちゃったかもね」

蓮は、自分の手に持つお皿にのった大量のソレを見て首を傾げる。

仕込みは昨夜してあったので、今しがたキッチンにて最終工程を終えた手作りのお菓子。

「王子殿、そんな事ないですぞよ。もしそうだとしても麻呂が食べるでおじゃ」

蓮の言葉に手にお茶のセットがのったお盆を持ち、首を優雅にゆっくりと横に振る青年。

彼は蓮と同じ校紀委員であり、名前は平等院麻呂（びょうどういんまろ）。長い黒髪を後ろで一つに結い、白い綺麗な顔に太くて短い眉毛が印象的な2年生。

「麻呂先輩。それ、眉毛並にうざいんで止めてくれません？　姫もいっぱい食べたいんで」

山積みにされた小皿を持ち、平等院に文句を言うのも同じく校紀委員であり、名前は藤原菫（ふじわらのすみれ）。小柄で姫カットが似合う大和撫子な美少女ならぬ、美少年である。顔に似合わず蓮以外には大抵毒舌であり、勝気な姫気質が印象的な1年生。

「麻呂の眉毛を馬鹿にするとな？　これは列記とした――」
「っていうか、王子先輩との二人っきりを邪魔しないで下さい。本気でそのマロ眉毛うざいんで」
「話を最後まで聞いて欲しいぞよ。それと麻呂の眉毛は関係無いのでおじゃる……」

後ろで言い合いする平等院と藤原は従兄弟関係であり、何だかんだと仲が良く「平安コンビ」と学園では有名である。
蓮は慣れたもので、彼らの事は無視して皆が待つと部屋のドアへと手を掛ける。

「今日のお茶菓子のメインは俺が作った豆大福。飲み物は抹茶ね」
「先輩、マジッスか！　やば、めっちゃ食べよう」
「ラッキー。今日来て良かったぜ、王子の美味いんだよな」
「王子先輩のとか感激です！」

キッチンのある方から出てきた蓮の手には豆大福が大量にのったお皿。ソレを見た室内の生徒達が歓喜する。
生徒は何も校紀委員の人間だけでは無く、一般の生徒や違う委員会の生徒など多種多様である。
こういった風によく此処ではお茶会がなされ、生徒達とのコミュニケーションを大事にしていた。

適当人間の蓮が居る時点で、お固い規則は既に消えていた。

校紀委員と言えど、同じ生徒同士。規則等の決まりを盾に、上から「～しろ」と言う様な傲慢くさった高圧的な態度をもって、指摘をするのは良く無い。ソレをした所で教師陣と同じか、或いはそれ以上の鬱陶しい存在にしか見えない。

まずは仲良く、同じ立ち位置の存在で居なければならない。加えて、注意を促す時は「命令」と言うよりは、友人が「お願い」をする様な軽い指摘で充分である。

あまり強く言っても仕方がない。一度言って聞かない人間は、何度言っても大抵は根が頑固であり、そう易々と変わるものでもない。

別に諦めている訳でも見放している訳でも無い。そう言う煩い役割は教師等で事足りている。再度、校紀委員が言われるのは癪に障ると言うもの。

校紀委員会室の中は、和やかな雰囲気であり非常にフランクである。

よく生徒達が校紀委員に相談事をしたり、此処に集まる皆で解決策を練ったりトランプで遊んだりと色々な所を見掛ける。

しかしながら、彼らの本業である仕事の方もやらなければならない事もまた事実であり、たんまりと山積みになった書類が中央に設置されたお茶会広場からでもうかがえる。仕事スペースと仕切られた衝立越しで、何人かは必死で書類と格闘していた。

――コミュニケーションばかり大事にしてる訳にもいかないわけさ。

とは言っても、後から後から校紀委員会室に入れかえる様にして出入りする生徒達に、お茶会も相談事も止む気配は無い。

時間を決めて打ち切るのも良いのだが、相談事に関しては年中無

休並の態勢を取りたい。
生徒同士では解決できない悩み、又は教師には打ち明けられない事情。
そんな時に、同じ生徒でありながら仲介に入り指摘できる立場にある校紀委員の出番である。
彼らなら、其処まで大事にはならずに程良い感じに丸く収める事が出来る。
故に、ローテーションで役員の皆が仕事と休憩も兼ねたお茶会、相談事に対応している。

蓮はお茶会広場にて、情報収集も兼ねた雑談等を少しして、終わらぬ書類の山の存在と休みで空いた人員の穴埋めの為に、一足早く時間を切って仕事場へと向かう。その際、仕事中の役員にお茶菓子とお茶を忘れずに持って行き配って置く。
この様な事は年下である後輩に任せれば良いかもしれないが、蓮は人を尊敬に値するかしないかを基準に考えており、年齢における上下関係には然程興味がない。手が空いているからやる、又は適当に自分がしたい様にしているだけである。

「はい、どうぞ。――少しは休憩しなよ」

蓮の気質を知っている者ばかりなので、後輩達も気にせず「ありがとうございます」とお礼を言って受け取っていた。
そんな蓮が居る所為か、風紀委員では意外と上下関係が厳しく無く、礼儀に欠かない程度の敬語と尊敬のある態度を持っていれば文句はなかった。

校紀委員では家訓となるモノが存在している。
其の家訓の中には、「変わらぬ善さと固定概念や古い思想は違う。新しい考えの下、未知なるモノにチャレンジせよ」と言う格言が記

されている。
　此処では、年功序列制ではなく、実力主義の思想の方が強く持たれている。
　ちなみに、各自に配付される『校紀委員』の腕章と家訓や校則基準等が書かれた役員手帳には「変わらぬ善さ」を表しており、蓮による羊のバッジや羊手帳といった改造までは、なされていない。

　真面目な生徒は、この格言を読んで熱心に頷いていた。
　そんな彼を見て、委員長の蓮は言った。

「知ってるかい？　この格言にはね、続きがあるんだ」

　――チャレンジせよ。今日から君は革命者であり、新たなる時代を切り開く偉人になろう。

「だがしかし、責任は君にある。故に、他者はその行動に責任を取らない」

　――実に、無責任な格言だ。傲慢な言葉であり、人を魅了する言葉でもある。

「まあ、失敗は成功のもととも言うしね。コレの捉え方は君次第だ」

　と、いつかの懐かしい記憶がふと蘇り小さく笑う。
　書類整理に追われてる役員達をしりめに、先に自分の放課後分の仕事を終えた蓮は休憩も兼ねてクルクルと椅子を回して遊んでいた。
　机の上には生徒手帳が開かれて、無造作に放置されている。良く見ると格言の著者の欄に『ＲＥＮ』と小さく名前が書かれていた。

05

日も完全に落ち、外は真っ暗である。
雨音も大きくなる一方で、止む気配をみせない。

第二下校時刻を知らせるチャイムが鳴る。全ての活動に置いて延長届けのなされていない者は帰宅する時間を指していた。
校紀委員会室でも、校紀委員以外の生徒達は正式な理由が無い為、延長届けが受理されない。皆、素早く支度を済ませて挨拶をし帰っていく。残っているのは、役員の生徒達だけである。

処理能力が人一倍早い蓮が、後半は全員のサポートに周り、山積みにされていた書類も一段落つきそうな気配を見せていた。
校紀委員の原則として、残業は延長届けの時間だけで充分とし、帰宅後の仕事の持ち帰りは禁止となっている。これは蓮が定めたモノであり、以前までは仕事の持ち帰りが可能であった。
蓮の中では、学生の時間を潰してまでも力を注ぐモノでは無いと言う考えが存在する。家訓の一つ「若者よ、青春を謳歌せよ」である。
加えて、書類の持ち出し等で紛失されても困る。役員の監督不行き届きが問題視された所で、他人の行動を一部始終監視して口を出すなど無理である。
責任の取り様が無い。辞任等しても良いが、対して実のなる終わり方では無いと言うのが蓮の考えであった。

疲労からか、僅かに霞むレンズ越しの視界。
鏡で確認すれば、白い眼球が赤く染まっている。確実に充血して

きており、まばたきする度に乾いた音がしていた。
眼鏡を外し酷使し過ぎている目に、目薬を数滴垂らす。瞼を閉じてしばし休息する。

一息吐いていると、勢い良くドアが開いた。

――誰かと思ったら、ミヤくんか。

鬼の形相で入って来た黒髪短髪の男子生徒。彼も校紀委員の1人であり、「校紀の鬼」として有名な副委員長の本城雅（ほんじょうみやび）である。
釣り上がった鋭い目が印象的なイケメンな強面だが、些か今はソレが度を超えており、泣く子も黙る以前に逃げ帰る程の怖さを放っている。
他の役員達は吃驚し、若干青ざめて引いていた。

「今日はいつもより遅かったけど、何か面倒なコトでもあった？」
「ああ、さっそく転校生が生徒会の奴らと問題を起こしたそうだ」

大抵、本城はその容姿故に現場担当になる事が多く、デスクワーク等の仕事は見回り後であり、此方へと帰って来るのは遅いのだ。
ドシドシと音を立ててこちらへ向かって来た彼は、眉間に皺を寄せて蓮へと大量の書類を渡した。

――うん、はっきり言って要らない。

「あー、やっぱり？　これから大変になりそうだね、マリモくん」

蓮は心配であった。
転校生が起こす事件から発生する書類整理。それが今以上に増えて行けば、確実に疲労困憊で倒れる役員が出る自信があった。

問題は今日限りにして欲しい所であり、校紀委員の為にも平穏に過ごしてくれる事を祈るばかりである。

「ありがとう。ミヤくんは、とりあえず休んでて」
「いや、まだ仕事が残っているからな」
「そんなの後で良いから。君は休むのが仕事だよ」

溜息交じりに笑って書類を受け取り、今までその問題で現場を走り回って対応していたであろう本城に礼を言って無理やり席で休ませた。
疲れて無いと本人は言っているが、このままやらせたら彼のストレスは倍増、場の雰囲気は悪くなる一方だと予測できる。

――ヤの付く家業のお兄さんも吃驚な強面強度が際限なく上がって逝っているよ。これは、本気でキテるね……。

真面目から来る、彼の威圧感は半端では無い。お陰で近くにいる役員の数人が失神しかけ、他の皆にも支障をきたす恐れがあった。
終わるものも終わらないと言うものである。

自身の席の近くに居る平安コンビの平等院と藤原にお手伝いを頼み、皆へと休憩するように声を掛ける。
蓮は、2人を引き連れてキッチンがある方へと向かう。
昨夜に仕込みで作っておいたのは、何も豆大福だけではない。冷蔵庫には、既に完成済みの甘さ控えめのチョコやフルーツ、チーズ等と様々な味のケーキが入っている。
流石にコレを多く作るのは時間も無く大変だったので、校紀委員用としてとって置いたのだ。

「2人はいつも通り、お皿と紅茶の準備をお願いね」

「分かったでおじゃる」
「マロ眉毛以上に了解です」
「悪いね、ありがとう」

平等院と藤原の2人に指示した後、蓮は冷蔵庫からホールケーキのお皿を数個取り出し、綺麗に人数分に切り分けていく。その際、小皿に盛るのは面倒なので、そのままお皿を3段型のケーキスタンドに置く。その作業を繰り返し、3つのケーキスタンドを台車にのせて運んで行く。

お茶会広場にて、皆で揃いケーキと紅茶を片手にまったりと休憩をとる。

ケーキの味はどれも好評の様で、蓮も一安心である。

「皆の衆、すまぬが麻呂はおかわりさせて頂くでおじゃる」
「眉毛先輩、姫がおかわりするんで退いて下さい。」

大食いの平等院と甘いモノには目が無い藤原の為に、蓮は多めにケーキを作ってきたのだが、些か2人のペースは早い。

まるで競争をしているかのように、次々とケーキが彼らのお腹へと消えていっていた。

しかしながら、鳳来の生徒らしくマナーは完璧であり、品の悪さを感じさせない。無駄な所で、優雅さや品格の違いをアピールしていた。

周りに居る者達は、ソレを見てお腹いっぱいになるほどであり、紅茶を飲みながらゆっくり談笑等してくつろいでいた。

それに、彼らを止める人間が此処には存在している為、下手に絡むのは野暮と言うモノである。

「ちょっとは自重しろ！　このバカ平安コンビ！」

――ゴチンッ！

モリモリと食べ続ける彼らの頭に、本城は目を吊り上げて拳骨をお見舞いする。

実に、良い音が室内に響き渡っていた。

「母上殿、ちと手加減して欲しいですぞ。痛いでおじゃる」

「マロ眉毛並に痛いんですけど。ママの所為で今さっき、姫の尊い脳細胞が消え、大事な何かを忘れました」

「だーれが、てめぇらの母ちゃんだっコラ！　それと、菫。てめぇは、そんな事で泣くんじゃねぇ！　女々しいんだよ」

あまりの痛さに、平等院と藤原は頭を抑える。藤原の方は、目に涙を溜めて訴える程だ。

「うるさいです。ママは責任を取るべきです、姫に今すぐ土下座して謝罪して下さい。ママみたいに、単細胞な人間にはなりたくありません」

「今のは確かに、母上殿が悪いですぞ。謝った方が良いでおじゃるよ。つでに、麻呂にも謝ってたも」

「――……あ？」

――あーあ、完全にキレちゃったよ。ミヤくん、すぐプッツンしちゃうからね。扱い注意だよ？

本城は般若の顔で口調悪く怒鳴り出し、蓮が止めるまで数十分程度、３人仲良く良い争いをしていた。

見てて面白い為、本当は止めたくなかったのだが仕事が残っているので致し方ない。

「はいはい、ストップ。お遊びもこれまでだよ。――皆に迷惑を掛けちゃいけないよね？」

手をパンパンと叩き、仲介に入る。蓮の優しい笑顔に、3人以外の一同もブリキの如き鈍い動きで揃って首を縦に振った。

流石は、この個性豊かな校紀委員の頂点に立つ長である。

この場に居る誰もが、笑顔の中に秘められた圧力の前には、従う外なかった。

その後は、皆で仲良く後片付けをして仕事に戻って行く。

実に、テキパキとしており機敏な動きであった。

何だかんだとありはしたものの、本城の苛々も軽減した様子。それを確認した蓮は先述、彼から大量に渡された書類へと目を通し始める。

転校生の『櫻井奏』（さくらいかなで）による器物損壊等の被害報告書を見て、眉が寄る。

転校早々、何をどうやったら此処まで大量の用紙を増産させ、飛び火する様に拡散させて問題を起こすのか不思議である。

最早、蓮の中では始めから無かった好感度が下がる一方であり、彼の名前は脳内変換で「マリモくん」と定着しつつあった。

数十分もすれば、大量にあった書類もあと数枚となりラストスパートである。

皆の方を見回せば、彼らも終わりそうな様で気合いが入っている。

――もう、今日は帰って寝たいね……。

蓮は最後の紙へとペンを走らせ、大量に積み上がった処理積みの山へとソレを追加する。
王子と呼ばれるだけあって、笑顔は崩さないも若干げんなり気味の蓮。しかしながら、何処かやり切った感も確かに窺える。
周りも似た様な感じで、「終わったー」と涙ながらの歓喜の声をこぼしていた。他にも、デスクの上で燃え尽きたのか死んだような顔を晒す者など様々で、大分お疲れな校紀委員の生徒達。

「今日もお疲れ様。早く寝るんだよ？　――それじゃ、気を付けてね。解散」

そして、皆仲良くお疲れ様と声を掛けて解散し、寮へと帰って行く。

蓮は面倒な事が嫌いだが、このアットホームな校紀委員が割と気に入っていた。
今では、校紀委員長として此処の代表に成れた事を誇りに思い、護って行きたいと心の底で感じていた。

06

今日は快晴である。
窓の外からは優しい暖かな日差しが射し込み、眠気を誘う。
そんな中でも、校紀委員は忙しく寝ている暇など与えられない。
最近増えつつある書類の数に、蓮達は昼休みも自主的に献上していた。
元々、校舎内と外の見回りもあり、一か所に留まってゆっくりとした昼など迎えた事は無いが、デスクワークよりは気晴らしになる。普通に考えて、授業だけで充分なのに昼も放課後も机と向かい合うなど嫌に決まっている。

プライベート等の人権も尊重し、監視カメラは少数しか設置していない。加えて警備員も経費削減や威厳等色々あり、門付近にしか配置していない。
その為、監視の行き届かない場所にて自主的な活動項目である巡回は大切なのだ。
不埒な者が居ないかと言う目的でされる見回りの動員数を減らすのは、苦肉の策である。自分達の大切な仲間である生徒達の安全を守れないのは酷く辛いモノが有り、校紀委員として名が廃ると言うもの。
だがしかし、現状は校紀委員の数名が過労で倒れる寸前。休ませたいが放課後延長は外せない。加えて、蓮が自室に持ち帰って睡眠時間を大幅に減らしてもこの有り様。既に手を尽くしての決断だった。

「――はい。そうですね、分かりました。至急、向かわせて頂きます」

校紀委員会室に閉じこもり仕事をいたのだが、この忙しい中、教師陣から一本の電話が掛った。

――流石だよ。教師は理事長の血縁者と生徒会の問題に手を出したくないと。

「蓮、どうした？」

「食堂で転校生と生徒会が騒ぎ起こしてるから止めてくれってさ」

「なるほど。ご飯もまだな麻呂達を態々出動させる程、自分達は出向きたくないんでおじゃるな」

「うわー。マロ眉毛並に教師の存在価値なしって言うか、今すぐ辞職しろって感じなんですけど」

態々、委員長の蓮の携帯へと連絡した内容に一同は僅かばかしの失望を感じていた。

「生徒の問題は生徒が解決するべきである」と、体の良い言い訳を並べ校紀委員へと仕事が回って来ていた。

理事長の甥相手となれば、学園の教師生命を懸ける必要性も出て来るかもしれない。そんなリスクを背負ってまで、出張るのは馬鹿と言うもの。

加えて、生徒会の役員も各自が権力者の息子達であり、生徒達にも人気が有る。

自身の保身を考えた上での行動理由なのは分かるが、少しは此方の現状も考えてから物を言って欲しいと言うものである。

――まぁ、俺相手に泣きついて頼むんだから相当だよね。これで、無視って言うのも可哀想でしょ。

電話越しからでも分かるほど、低姿勢であった。

理事長の甥等の相手も怖いが、日本の財閥の代表格である神堂家を敵に回すのも怖いと言う奴である。

しかしながら、蓮の「王子」としての人柄の良さと笑顔で許容する心の広さで、彼らは選び蓮に泣きついたのだ。

「そうだなぁ。多分メンツ的に面倒な事になるから俺とミヤくんで行くよ――後はお留守番ね」

顎に手をあて、少し考えるポーズをとった後、何時もの笑顔で告げる。

平等院と藤原や他の役員達も行く気満々であったが、今回はパスである。第一、大勢で出向くものでもない。

特に平安コンビの2人を連れて行くは気は更々なかった。彼らが出ると場の空気を壊しそうで、更に混乱させる確率が多いにあり収集が付かなくなる。

2人には待機を申しつけ、他には破天荒な彼らのおもりをこっそりと頼む。

実質的には休憩タイムであり、昼食に用意していた皆のご飯を先に食べてくれて構わないと言い、蓮と本城の2人で急ぎその場へと駆けつける。

「蓮、平安コンビを連れてかなくて良かったのか？」

「いいよ。連れてくとカオスでしょ」

――面白いから連れて来たいのも山々なんだけど、今はそんな状況じゃないしね。

方針の違いかは不明だが、昔から校紀委員と生徒会はあまり仲が良くない。
何時でも問題な平等院と藤原の２人は、例に洩れず生徒会嫌いが激しかった。
特に、生徒会長だけは「いけ好かない」と言い、どうにも折り合いが悪い。会う度に嫌悪感丸出しで、本城の時とは違った口喧嘩を巻き起こしていた。
そして、質の悪い事に生徒会書記である双子がソレに便乗して、日々の鬱憤を吐き出すようにして会長をイジメ出す為、実質４対１の攻防が始まるのだ。
この時ばかりは、生徒会も校紀も関係無く、打倒生徒会長の狼煙が上がり仲良く手を取り合い口喧嘩が始まる。面白半分の会計と委員長による野次等も入るなど、ちゃっかり勢の橘と蓮も大いに愉しんでおり、毎回大事にまで発展していた。
まあ、そんな時は決まって、副会長と副委員長の副同士、又はオカン同士、それぞれが自分の所の役員に制裁を加えて終息を迎える。
そう言う理由もあり、事を更に荒立てる可能性を見越し２人を外させてもらったのだ。

現場である食堂へと駆けつければ、ザワザワと事の中心を見ながら話している生徒達。
中心部へと目をやれば、転校生の桜井をめぐって何やら生徒会役員達と彼の友人が言い争っている様だ。
隣を見やれば、本城が眉間に皺を寄せていた。
不機嫌なのを隠す気は無いらしく、舌打ちまで追加してくれた。

「ちょっと良いかな、悪いけどそこ通してね？」

「退け」
「ごめんね、ミヤちゃんが。今、機嫌悪いみたいなんだ」
輪になる様にして、桜井達を囲う生徒達に退いてもらう。
その際、強面をさらす鬼モードの本城に殆どの生徒は怯え、一斉退去していった。

蓮達2人を阻むものは無くなり、広がる視野。
目的地までのルート確保が出来た事を嬉しく思い、悠々と歩き出す。

そんな校紀委員のトップ2人の御登場により、騒がしかった辺りは一気に静まり返る。
渦中の人間達はそれにも気付かず、未だ言い争っているが。
否、訂正しよう。確実に生徒会役員の会計である橘等の一部の確信犯は、こちらに気付いている。
一瞬、此方を見て口端を上げ笑っており、ウインクやピースをする者さえいた。
どうやらあの中に居る数名は、態と煽って蓮達校紀委員を出動させる様にし向けたらしい。

――全く、面倒な事をしてくれるよ。

蓮の隣に立つ本城も、怒りよりも鬱陶しそうに溜息を吐くほどだ。

パンパンと手を叩きこちらへと意識を向けさせる。

「はいはい、ストーップ。――良い年こいた青年達が揃いもそろって言い争いしない」

なんで、こんな小学生の先生まがいな事を蓮がしなければならないのか甚だ疑問だが、致し方ない。
静かになりはしたが、転校生の目が異様に輝いてこちらを凝視していた。

――否、俺では無く、隣に居るミヤくんだけを見ているのだろう。うん、きっとそうだよね……。

と、思考を飛ばし遮断した。

「バカ、現実逃避してんじゃねえよ。明らかにお前見てんだろ」

それも虚しく、本城にツッコまれて終わりを迎えた。

「お前、名前何て言うんだ！　教えろよっ！」

……あー、空耳かな？

行き成りの展開に、一般人であり普通の人間であると自称する蓮は理解出来ず、笑顔で流した。

「おい！　無視すんなよ、俺が名前聞いてんだから言えよ！」

俺様会長並の傲慢な言い方にプラスして、人を不愉快にする空気を彼は持っているらしい。
蓮は割と無関心な為、そこまで気にしない。故に平気なのだが、周りの人間、主に本城や橘、ファンクラブの生徒達の空気が一瞬凍った。

校紀委員長な為、いずれ知る機会もあるだろうと思い、名前を教えるのは構わない。
だが、この状況で教えて良いのだろうかと迷い、考えるも、やはりこの場を逸早く抑える為には言うのが一番である。

「ごめんね、名乗るのが遅くなって。俺の名前は神堂蓮(しんどうれん)だよ。一応、校紀委員長もやってるから以後宜しくね？」
「蓮だな。俺は、桜井奏(さくらいかなで)だ！　――友達なんだから奏って呼んで良いぞ。よろしくな、蓮！」

もう名前を呼び捨てる程のお友達なんだと、若干驚きはしたものの、これもまた十人十色な証だと納得し了承する。
大抵が、蓮の事を名前で呼ばずに「王子」と言うあだ名で呼ぶ事が多い。何とも蓮には新鮮であった。
と言っても、実際に彼を名前呼びするのは表だけで、心の中では既に定着しつつある「マリモくん」で行く事は決定事項である。

そのまま流れる様にして隣に立つ副の本城も自己紹介し、桜井による一方的な「お友達」となった。
どうやら彼は桜井と親しくなる気はないらしく、名前と役職だけ言い傍観に徹していた。
あのヤの付く家業顔まけな強面とオカンスキルを持つ本城が、自分から避ける様にして拒絶反応を示すなんて本当に珍しい事である。

07

色々あったが、取り合えず今回の騒ぎの原因収束の為に、何があったのかを彼らに聞く。

――うん、流石に聞き取れないよ。俺のスペックを高く見積もっても、豊聡耳ぐらいなんだけど。

「わかったから、1人ずつでお願い」

皆が一斉に自分の意見を言いだして時間が掛ったが、話をまとめると桜井とご飯を食べたいが為に誰が一緒に食べるかという問題で喧嘩になったとのこと。

何とも如何でもいい問題に呆れはするものの、当人達からしたら真剣で大事な事の様なので其処には突っ込まない。

時間も無いので打開策として、テーブルをくっ付けて皆仲良く昼食を摂るように告げる。

席に関しては、公平にジャンケンで決めてもらった。

「「我らが王子の隣をゲット出来るなんて、今日はツいてるー！」」

「……」

「ッチ」

「さいあくー」

何故かは知らないが、蓮と本城も一緒になって昼食をとるはめに

なり、気付けば両隣には双子が座っていた。
彼らは生徒会書記の2年生で名前は秋月海（あきづきかい）、秋月陸（あきづきりく）。
兄の方が海で弟の方が陸。性格も容姿もほぼ一緒で、赤茶の髪の毛が印象的な双子の兄弟である。

ちなみに蓮の前には、桜井の友人の1人である大人しそうなタイプの大野啓太（おおのけいた）。
大野を挟んだ両隣に本城と橘。2人はムスッとした表情と共に秋月兄弟を睨んでいた。
先輩から送られる悪意と嫉妬の混じった視線も何のそのである。意に介さぬ強靭な精神を持っており、双子は始終愉しそうに笑っている。

「どうでもいいけど、早くご飯食べようよ」

間に挟まれた1年生の大野が居心地悪そうにしており、ソレを不憫に感じた蓮が2人に言い放つ。

「「そうそう。王子の意見に僕達はサンセー」」

自分達が所属する生徒会長でさえ、5割は敬わない従わないで有名な秋月兄弟であるが、相対する様に存在する校紀委員長の蓮には大変好意的で従順であった。

一時は険悪な雰囲気であったが、今では割と和やかに食事をしている。
相変わらず隣のテーブルは騒音に塗れているが……。

観察が好きな蓮は、食事をしながらさり気なく前方に座る大野へと視線を向ける。

先程会ったばかりな為、断定は出来ないが大野からは安堵が窺えた。
これは、彼の両隣に座る本城と橘が穏やかに食事をしているからでは無く、何かとトラブルを巻き起こす桜井と離れたからだと蓮は考えている。
彼を注意深く見れば、指には不自然なほど何か所にも渡り絆創膏が貼ってある。加えて、裾の隙間から包帯が視えていたりと不穏なモノが見え隠れしていた。

――まあ、此処までくると予想も確実になるってもんだよね。

桜井の友人は大野を含め3人。「名乗ったら皆、友人」の定義を掲げる彼からしたらもっと友人が居るだろうが、其処は今は置いておく。
1人は爽やかスポーツ青年、もう1人は不良君、どちらにしても美形であり爽やか青年の方には親衛隊が付いている。
大人しく容姿も周りと比べれば普通の大野に対し、他の2人はどちらかと言うと目立っている。

大方、バックが理事長で生徒会役員達などからも愛されている桜井には直接手を出せない親衛隊達の一部が、八つ当たりの様に大野くんに手を出しているのだろう。
それにしても手が早いと、蓮は思う。先程から、何を食べているのか全く分からない程、思考と味覚が飛んでいた。
こちらの情報によると桜井と生徒会が会ったのは転校初日と最近であり真新しい。

となると、一番過激派で有名な生徒会長の親衛隊且つ、規律を乱しやすい下っ端辺りだろう。
割かし親衛隊の幹部陣は有能でしっかりしているのだが、会長の

所の場合、親衛隊の人数が多いだけに、きちんと下まで管理が行き届いていない。

今日も後半と迫り、時間が無い中、何処かしらに時間を作らなければならないとなると溜息しか出ない。

面倒だが、暴力行為まで及ぶとなっては早急な対応が求められる為、今日締切の書類を後回しにしてでもやらなければならない。

「悪いけど先に失礼するよ。――ミヤくん、撤収だ」

桜井達には悪いが適当に理由を付けて、食事が終わった後は早々に校紀委員会室へと足を向けた。

「王子先輩と雅先輩、お帰りなさい。王子先輩のご飯美味しかったです」

「お帰りなさいでおじゃ。お腹一杯で麻呂は満足ですぞ」

蓮が作った昼食を食べ終わった様で、皆がお帰りと帰還の挨拶と共に感想を言ってくれた。

「ただいま。うん、ありがとね」

「ああ、ただいま」

生憎と急ぎの件が控えている為、簡素に応え、皆にテキパキと指示を出して行く。

次いで、各親衛隊会長を今日の放課後に必ず来る様にと連絡を回し、打開策を練る。

「まずは、緊急招集で皆には迷惑を掛けてしまって今日は本当に申し訳なかったね。――来てくれた事に感謝してるよ、ありがとう」

緊急招集とあって、いきなりではあったが全員がきちんと参加し、校紀委員も含めた話し合いが予定時刻に行われた。

話し合いの結果、確実とは言い切れないのが難点ではあるが取り合えず暴力行為だけは禁止（阻止）する事で総意。

他の事に関しては、保留、又は未定事項として思案中である。

と言うのも、身体的な暴力意外の陰口や陰湿な嫌がらせまで、徹底的にこちらで取り締まる事は不可能に近い。

行為自体は防げても、他人の感情まではコントロール出来ない。

負の感情がすぐさま消える事は難しく、広がりつつある嫌悪の目を止めるのもまた同じで難しい。

このまま転校生の桜井が生徒会長や副会長等、役付きの生徒と更に近づき親衛隊を刺激すれば尚のこと。

蓮達校紀委員としては、親衛隊達の当たり所を少しずつ逸らし普段の状況へと近づけて行くという手立てしかとれない。

被害者となる大野には悪いが、早急な改善は見込めなかった。

〜〜〜

――実にままならない。面倒すぎる……。

自室の椅子に座り天井を仰ぐ。

目の上に手を乗せ、蓮はしばし、物思いに耽っていた。

――なーんて、悩むの俺のは自己に反する。アイデンティティは大事さ。

「こう言う時は寝るに限る。そうでしょ？　――それとノックを忘れてるよ」

ドアを開け、後ろに佇む人間にそう言い放ち、蓮は笑った。

番外　Okan side

「”王子、僕と結婚して下さい！　それか、姫を下さい！”――堂々と二股宣言ですか？　眉毛並にうざいんですけど。それと、王子先輩も姫もあげません」
「”本城雅って言う鬼が怖くて夜も眠れません。どうしたらいいですか？”――知らねえよ！　コイツコロス」
「”麻呂の眉毛を一本に繋げてみたい”――やめてたも……」
「”なあ、神堂。俺、教師止めていいか？　どう思う？　後でデートして”――ホストに帰ればいいと思うよ」

こんないつもの日常が段々と変わって行く。

「”桜井奏と親衛隊との乱闘騒ぎ”」
「”桜井奏による校舎一部損壊事件”」
「”奏る騒音被害報告”――これは誠、上手い表現ぞよ。転校生の名前の奏と掛けてあるでおじゃ」
「”生モノ（マリモ）放置の訴え”――姫達に訴えられても困るんですけど。役所にどうぞって感じ」
「アホか。何だこの……”マリモが夢に出てきて怖い”って！　俺達の事、完全に舐めてるだろ！」
「はいはい、ミヤくん落ち着いて。はあ……”マリモは海に還して来て下さい。（後でデートして）”――ね」

――飛んだ嫌われ者だ。最早、人間扱いされてないしね。それと、ホストは帰れ。

と、校紀委員の所へ毎日の様に送られる被害届の内容に呆れ果てる面々。
校紀委員では各所に相談箱を設置しており、依頼等を気兼ねなく誰でも簡単に出来る。その所為か、被害報告書に交じって生徒達や教師による変な訴えまで届いている状況。実に、頭が痛い。

――此処（校紀委員）は、環境云々の相談所でも慈善団体でも無いんだけどね。規模が大きすぎて手に負えないよ。

「明日になったら良い方へと進展してるといいんだけど」
「無理だろ」

全員の溜息が校紀委員会室にこぼれおちる。
毎日毎日、事後処理に駆り出され書類整理に追われる身にもなって欲しいものだ。
別に桜井が起こす事件に対しての書類で夜遅くまで残る事になったとしても、蓮達は彼に対し不平不満はあれど責めはしない。

いち生徒を護る義務が蓮達にはあり、生徒達の問題を対処するのも又、校紀委員の役目。
学園の為にと、選ばれて校紀委員になった身としては仕方ないと諦める事も出来る。

教師達が生徒間で出来るだけ解決しろと言う様に、校紀委員としても成るべく、蓮達が干渉せずとも問題の起こした生徒間達の間で解決して欲しい。
そして、義務教育を離れた者達へと新たに付け加えられた此処の方針でもある。

だが、流石の蓮達も日を追うごとに問題が大きく、数も増えると

言う大事にまでなると話は別である。面倒ではあるが、何かしらの手を打つ他ない。
限られた人数（役員達）で回すには、コレ以上増えると今の彼らの状態を見ても思うが無理だ。
過労で校紀委員自体が潰れかねない。
見渡す限り、隈隈隈で、彼らの綺麗な顔には不釣り合いなソレが目の下へと浮かんでいた。

――美形は国の宝だって言うけど、俺もそう思うんだよね。

その為、無駄に整っている校紀委員の顔を前に、何て事をさせてしまったんだと申し訳ない気持ちでいっぱいになる。
せっかくの目の保養且つ、心の安らぎがB級ホラー顔まけのおどろおどろしいモノへと変貌をとげようとしていた。

〜〜〜

【本城雅ｓｉｄｅ】

「今日も皆、お疲れ様。帰ったらちゃんと、ご飯を食べてお風呂に入って早く寝るんだよ。それじゃ、また明日ね？　解散――」

あいつは、ホントに馬鹿だ……。

此処の戸締りは何時もあいつの役目だ。
そして、俺達校紀委員のメンツは皆知ってる。
最近、あいつがバレ無いように締切が微妙に迫っているのを狙って、俺達のデスクから書類を抜いて家に持ち帰ってる事も、あいつの目の下にあるドス黒い隈を必死に隠している事も。
いくら、俺達が疲れているからといって書類が少なくなっている

事に気付かない程、目は腐って無いっていうのにな。
まあ、ソレを指摘した所であいつは変な所で意地っ張りだから無駄だろうし、俺達の事を想っての行動だから強く言えねえんだけど。
それにしてもだ、このままだと俺達よりも先にあいつの方が倒れそうで怖い。
早いとこ、コッチも手を打たねえとヤバイな。

「――もしもし。そうだ、例の件はそっちに任せる。ああ、宜しく頼む」

番外　Ｔｙａｒａｏ　ｓｉｄｅ

綺麗な夕日が窓の外から覗いていた。
下を見れば昨日の雨跡が残っており、大きな水たまりが視える。
だが、濁っていて水面には何も映っていない。土混ざりの所為で、底も視えない。

――浅そうだとは思うが、案外深かったりするのかもしれない。

そんなくだらない思考が頭をよぎり、何故か気になった。
しばしの間、何をするでもなく、ただぼうっとまだ見ぬ底を探す様に眺めていた。

ふと気付く。
それが何処か自分の様だと……。
澄み切った色など出せやしない心、映すモノなど高が知れている。
鮮明さの欠片もない世界で曖昧にひかれた線。塗られる色は淀み、描かれるのは物悲しさだけ。

気付けば視線の先は変わり、逃げる様に目を逸らしていた。

〜〜〜

【橘清四郎ｓｉｄｅ】

今日は何と、待ちに待った転校生がやって来る日！
ボクってバイだけど、世に言う「腐男子」って奴でもあるから楽

しみだったんだよねー。

って言うか、何だか知らないけどさー、ボクが会計の立場だから面倒だけど「下半身バカ」とか「チャラ男」とか演じてるわけ。

まあ、実際に下半身はゆるゆるだし元々語尾とかも伸びたりして、だらしない口調だったからボクにはぴったりな役割だけど！

うーん、今考えると演じてる訳じゃなくて素なのかもしんないねー。あはっ

ちなみに、言っとくけどボクは「腐男子受け」とか「チャラ男受け」とかじゃないからね？

マジ、受けとか考えらんないしー、男として産まれたのに掘られるとか勘弁でしょ。

一応、ネコちゃんたちとにゃんにゃんしてる「タチ」だから。

あと、ガチムチは目に毒だから嫌い！

細マッチョとかなら別に良いけど、ガタイが良いムキムキマッスルの野郎は見ててもなんか美味しくないからねー？

って事で、好きなのは美青年×美少年（女）とか3次元で見ても許せる絵面が綺麗なやつ。

だから、生徒会長×王道くんとか本気で期待してるんだよねー。

あ、別に平凡受けでも攻めでも全然いいよ、ガチムチじゃなければ！

とにかくさー、生で王道ちゃんのストーリーが見れるとだけあって、ちょっと興奮気味なんだよねー。

とりあえず、順調に事は進んでるみたい。

転校生を案内しに行った副会長のミーちゃんがお決まりの似非笑

顔を指摘されて、挙句ちゅーしたみたいで嬉しそうに帰って来た所。

〜〜〜

あれー？

なんでだろ、すっごくつまんないや……。

王道展開で、生徒会メンバー全員で食堂に行けば実際にマリモちゃんに会えた。

会長のマサちゃんはマリモちゃんの生意気な態度が気に入ったみたい。

ボクにとったらあんなの、このエスカレーター式の閉鎖空間には有り得ない態度なだけであって、身分を隠して外に出ればあんなのごろごろ居る。普通に考えるとただの礼儀知らず。

変装だと言ってもあんなださくて逆に目立ってる、あたかも絡んで下さいと言わんばかりの変な人間を気に入る要素なんて何処にも無い。

双子のカイちゃんとリクちゃんも気に入った様だけど、どうやら彼らは転校生を人としてではなく、新しいおもちゃとして見ているだけ。

まあ、この先おもちゃとしての興味から発展するって言うのが王道スタイルだけどね？

ボクも王道に沿って「気に入ちゃった」宣言をして皆に交じって参戦してみたんだけどさー。

物語とかを第3者として見るのとは違って、実際に当事者として物語りの住人になるにはボク自身が全くと言って良いほど、マリモちゃん自体に興味が無いから微妙だったんだよねー。

うーん、どうしよっかなー？
これからも、マリモちゃんに絡まないと王道ストーリーが拝めないんだけど、ボクもそれなりにデメリットを被らなきゃいけないからね。

だってさー、これから「セフレなんて止めろ！」とか「お前が傷つくだけだ、寂しいなら俺が傍に居てやる！」とか言って来るんでしょ？
此処で、正規ルートの会計チャラ男だったら、改心して「セフレ」との縁も切って純情路線走るんだろうけど。
その会計チャラ男役はボクであって、ボク自身の心には何にも響かないし？
偽善者紛いの言葉はボクにとったら余計なお世話だし、すっごく不愉快なんだよねー。

まあ、とりあえず頑張れる所までがんば――

「清四郎ー！　お前サボってないで仕事しろよなーっ！」

やっぱ、無理……。
何、あのマリモちゃん。ちょーうるさいんですけどー。
っつか、勝手に名前の方を呼び捨てされるのは予想済みだったけど、すっごく気持ち悪い……うげー。
あー、生徒会室にマリモちゃん入れるんじゃなかったな。

もういいや、ボクの仕事は終わってるし帰ろっと！
なんか、後ろの方できーきーお猿さんのように喚いてるけど無視むし。

最終下校時間はとっくに過ぎてるんだからさー、延長時間過ぎても残ってる方が可笑しいんだよね。

ほんとに無理。レンくん要素が足りないよー。レンくんかむばっくー！　ってか、ボクが行っちゃいまーす！

「あ、もしもしレンくん？　今すぐそっち行くから宜しく！　じゃ」

今日の晩ご飯はなんだろなー？

〜〜〜

【Ｍａｉｎｓｉｄｅ】

自室のキッチンにて、いつも通り夕飯を作っていれば先程言いたい事だけ言ってブッチした電話の主がやって来た。

「レンくーん！会いたかったよぉー」

「……はいはい、分かったから。セイちゃん今、包丁使ってるんだから危ないでしょ？」

ドタドタと音をたてて蓮のもとまで来たと思ったら、そのまま突っ込んで来た。

お腹辺りへと両手を回して背中へと貼り付く彼の勢いで、若干ではあるが前へとつんのめる。

危うく野菜を切っていた包丁の刃が壁に突き刺さる所であった。

抱きつくのは、もう習慣みたいになってる橘に抱きつくなとは言っても無駄である。

とりあえず、料理中などの作業中に突っ込んで来るのは止める様にと注意だけして、そのまま料理を再開する。

――きっとセイちゃんの事だ、何か嫌な事でもあったんだろうね。

いくら気まぐれの彼でも、やってはいけない事くらいの判断はちゃんと出来るだろう。

それに、先の読める賢い子だと蓮は思っている。

「……レンくん、ごめんね。」

背中にぐりぐりと頭を押し付ける様にして、ぼそぼそと小声ではあるが謝る橘に笑みがこぼれる。

こんなんだから、いつも彼に対して強く叱れないし甘やかしたくなるのだ。

「いーよ、次からは気を付ければ良いしね？　ほら、口開けて」

「ん？　あーん」

今夜のデザートに使う苺を一つ取り、従順に口を開けつつも状況把握出来ていない姿は何とも可愛らしい。

赤く熟れた美味しそうなソレを彼の口の中へと放り込む。

「あまーい」

【橘清四郎ｓｉｄｅ】

もっさいマリモちゃんによる吐き出したくなる様なモヤモヤした感情から早く解放されたくて猛ダッシュで寮内を駆け抜ける。

走っている間は何も考えなくても済んだし、到着点に着けばボクの大好きなレンくんが居る。

いつもの様に返事も待たずに勝手にレンくんの部屋へ入って行く。リビングを見渡せば其処にはレンくんの姿はなかった。

と言う事は、台所だろうと目星を付けて、そちらの方へと足を向ける。

どうやら、当たりのようだ。

美味しい匂いと共に、大きくて頼りがいのある馴染みのある後姿を見つけ、勢い良く背中へと抱きついた。

細腰に手を回し抱きついたレンくんからは、洗剤と香水が上手く混じり合ってきつく無い柔らかな香りがほんのりとかおった。

ボクとは違うその香りをおもいっきり吸い込み、しばらく堪能して荒らんだ心を落ち着かせる。

言っとくけど、別に変態とかじゃないからね！

それと、何も考えずに突っ込んで行っちゃってごめんね、レンくん。

包丁を持つレンくんに対して、危険に晒す行為をした事に気付き謝ろうとした。その時、ふと気付く。

ねえ、レンくん、痩せたでしょ……。

ボクが居ない時、ちゃん食べてる？　ちゃんと寝てる？　辛くなったらちゃんと相談してよ……ね？　お願いだから――。

次から次へと考えれば思う所がたくさん出て来て、顔が歪むのを抑えきれない。

――どうして今までボクは気付かなかった？

いつもレンくんはボクの変化に目敏く気付いてくれるのに、ボク

はどう？

否、本当は気付いていたんだ。気付いてて見てないふりをしてたんだ。

だって、レンくんの事になると不安に押し潰されそうになる。だから、今まで考えない様に見ない様にして来た。

でも、こうやって一緒に居れば居るほど、近ければ近いほどにレンくんを想う。同時に、心の距離はボクを遠ざける。

――何でも無いって笑う笑顔が寂しくて、独りでも生きていけるんだって歩く背中が小さく見えて。何もかも遠ざけて、すり抜けて、偽って、前へ進むキミが放っておけなかった。

何も出来ない自分が酷く情けなくて、悔しくて、ボクはレンくんの背中を強く抱きしめた。

レンくんは強いよ。何でも出来るし優しいし。

だから、独りでも生きていけるかもしれないけど……ボクには――……。

振り返って、頭を撫でてくれるレンくんは困った様に笑った。

どうしてか分からない。何も困らせたいわけじゃないんだ。

床に落ちる雫さえも悲しくボクを映している様な気がして、夕べ見た水たまりの様に濁って視えた。

今日もボクらは近い様で遠い。曖昧な距離で誤魔化していつもの様に笑うんだ。

番外　Ｔｙａｒａｏ　ｓｉｄｅ（後書き）

書いている内に意味の分からない文章になってしまいました。申し訳ないです。

番外　Ｉｆ

【パラレルワールドｓｉｄｅ】

――とある世界の風紀委員会室～白昼夢？

「ここってペットの持ち込みオーケーなんだっけ？」
「んー、ダメでしょ。まあ、特例はあるだろうけどねー？」
「へえ、特例ね。ならさ、飼い主の人間がちゃんと躾しとけって話じゃない？　そもそも周りに迷惑掛けるくらいなら飼うなって話だよね。ホント舐めてるよね、俺らの事」
「あはっ。（レンくんの毒舌きたー）」
「あー、もしかしてペットじゃなくて観賞用だったりするワケ？」
「ナイナイ。ソレはありえないっしょ、ってか、モジャ毛を観賞しても目が腐るだけじゃない？」
「確かに。理事長もさ、あのマリモを生息させる為に誰が水槽の掃除してると思ってるんだろうね？」
「ねー。その内、ボクらが誤って水槽の水抜いちゃうかもしれないのに」
「そうそう、手が滑って水槽ごと落として壊しちゃうかもしれなのに」
「「ねー」」

美男子しである蓮と清四郎が首を傾げる姿は見目麗しく大変おいしいのだが、なにぶん空気が悪い。
無駄にお金がかかっている施設の室内とだけあって適度な温度調

整がされている筈なのに、何故か寒いのだ。
仲良く微笑ましい笑顔を満開にして晒すあの2人から、とてつもない冷気が溢れ出している。
と言うか、アレは笑顔を貼り付けているだけであって目は全くもって笑っていない。
よく見れば目の下にはドス黒い隈がくっきりと浮かび上がっているし、瞳孔も開き目が血走っている。
耳を澄ませば彼らが手に持つティーカップにどれ程の力が込められているのかは分からないが、ミシミシと音をたて軽くホラーだ。

そして、此処は風紀委員会室。
彼ら2人の他にも風紀委員のメンバー達が集まる場でもある為、この恐怖のブリザード発生地を目撃し被害を被っている人間が居ると言う事。

今まで仕事をしていた風紀委員達の手はガタガタと震えだし、顔は青ざめ鳥肌が止まらない。
あまりの寒さと恐怖で失神する者や、運悪く、風紀委員会室に用があり入った者はその場で硬直、或いはブリキのおもちゃの様な足取りでブツブツと念仏を唱えるなど引き返す者が続出する始末。

「マリモは分かったから、お前らいい加減にしろ。それと蓮は仕事お――」
ありったけの勇気を振り絞り、2人を止めようとした者も居たが……。
「なに？　ミヤくん。こっちは大事な（マリモ駆除の）お話中なんだよ。それに、俺の仕事は終わってるし問題ないよね？」

「って言うか、ミヤちゃんさー。ボク達、あんなマリモみたいに大声でお喋りしてないし、のほほんと笑顔で楽（愉）しく（マリモ滅殺）談笑してるだけなんだから邪魔してないでしょ？」

「「分かったら、さっさと自分の仕事でもしてなよ（ボク／俺達の邪魔しないでよ）」」

風紀副委員長である皆の母ちゃんこと本城雅は極上の（恐怖）笑顔を返されて撃沈した。

（（（誰でも良いから早くマリモを海に還して来てー！））））

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6650y/

学園王子in非王道

2011年11月24日23時51分発行